

「ベトナム国家大学ハノイ校派遣参加報告書」

京都大学人間・環境学研究所 D1 黄海洪

ベトナムは以前にも一度旅行で訪れたことがあります。旅行の主な目的は、旅先の特有の自然、文化を見たり触れたりすることとその地域で特異な体験をするということになると思います。今回は学生ビザで、ベトナム国家大学ハノイ校に2週間滞在しました。2週間の間、語学の習得、異文化体験など、学びを中心としたものが多くありました。

今回のプログラムに参加する前に、記憶の中のベトナムはデュラスの『愛人(ラマン)』の中のメコン河、トラン・アン・ユンの『夏至』の中のハロン湾、そしてアン・ホイの『Boat People』の中の戦争直後のダナン町で構成されていました。2週間を滞在してみますと、それまでの私のベトナムイメージがいかに観念的だったのかを痛感させられました。

ベトナムはアジアのラテンアメリカだという人もいます。世界銀行の最新調査によりますと、ベトナムの平均年齢は31歳で、平均年齢46歳の日本と比較しますと、ベトナムは若者が非常に多く、活気に満ちた国であることが容易にわかります。日本で3年から5年の技能実習を目的とした技能実習生の数は近年、中国を抜いてベトナム人が一番多くなっています。今後もベトナム人は日本にとって、ますます身近な存在になっていくでしょう。

今回訪れたハノイはベトナムの政治と文化の都です。ハノイは人口約800万で、市民の移動手段はほとんどバイクと車です。ベトナムの特質を「水」にたとえる研究者もいます。融通無碍なベトナムでは、水をあらずベトナム語の「ヌオック」は同時に「国」という意味があります。ハノイの道路では、バイクや車が一見無秩序に各自の行きたい方向に走っているように見えますが、お互いにぶつかることもなく、それなりに交通が流れています。それもベトナム文化における「水」の特質の表れだと言えるかもしれません。ハノイからバイクがなくなるはとても思いませんが、ベトナム政府は鉄道などを整備して、2030年に「バイク全廃」を目指しているそうです。

ベトナムというと、浮かんでくるものの1つがベトナム戦争です。ベトナムはもうすぐ終戦50周年を迎えます。ハノイの街中では、ベトナム戦争はすっかり遠い過去のように思います。旧市街は昔ながらに、ブロックごとに同じ商売が行われています。うなぎの寝床というような細長い建物が多く、2階建てから5階建ての家々が隙間なく立ち並んでいます。時折、手彫りのハンコ屋さんを見かけます。外資の工場が次々にベトナムに参入しているのは、ベトナム人の手先の器用さに一目を置いているからでしょう。

ベトナムの政治体制と経済政策は中国と類似しているところが多くあります。経済政策では、1986年に、「ドイモイ(刷新)政策」と呼ばれる市場経済を導入して以来、年々高い経済成長を遂げています。ベトナム政府の発表によりますと、2018年の実質GDP成長率が7.1%で、過去10年間でもっとも高い成長率を記録しました。急激に発展しているベトナムは、ASEANの優等生として、東南アジアでの地位を確立しています。

歴史文化の面においては、ベトナムはかつて1000年にも渡って中国に属していました。紀元10世紀、中国から独立を達成しましたが、以降、15世紀初頭に20年あまり中国の明朝の支配下に置かれていました。その影響で、ハノイでは今でも、漢字は古い建物に残っているのですが、漢字を読めるのはごく一握りの人のみらしいです。また、19世紀の後半に、ベトナムはフランスに植民地として支配されました。フランスによる占領は、ベトナムの食文化に大きく影響しました。バインミーは今やベトナムの国民食とも言える食べ物の1つです。

今回のサマースクールプログラムは、大きく①ベトナム語・ベトナム基礎知識の座学講義、②日本語授業への参加、③学外における実地研修、④現地の学生との相互学習・共同発表といった4つの部分によって構成されていました。個人的に、一番印象に残ったことは日本語授業への授業参加です。日本語を勉強し始めて1年という学生たちでも発音や文法などの間違いをおそれずに、一生懸命日本語で話しかけてくれるという点に感銘を受けました。日本語を勉強しているベトナムの学生とたくさん日本語学習に関する会話ができてとても有意義でした。また、非漢字圏の日本語学習者にとっての漢字の難しさと漢字教育の重要性を改めて認識しました。

「万巻の書を読み、万里の道を行く」、これは明代の董基昌の名言です。「たくさんの本を読んで博学多識になり、旅をいっぱいして体験を積む」という意味で、座学と共に広い世界に飛び出して様々な経験を積むことの大切さを説いた言葉です。これからも、できるだけ多くの本を読んで世界中の様々な国を訪れたいと思います。